

紅鯉（丘修三）

寺田守



一 作者と作品について

丘修三（一九四一〜）は、熊本県生まれの児童文学者。東京学芸大学および東京教育大学（現・筑波大学）で障害児教育を専攻し、卒業後は東京教育大学附属桐が丘養護学校など、養護学校教員として二五年勤務した。一九九二年三月に病氣退職後、執筆に専念するようになる。一九八七年『ぼくのお姉さん』で日本児童文学者協会新人賞、坪田譲治文学賞、新美南吉文学賞を受賞した。一九九三年『少年の日々』で小学館文学賞を受賞。二〇〇一年『口で歩く』で産経児童出版文化賞を受賞した。

「紅鯉」は、作者の郷里熊本を舞台とした短編集『少年の日々』（一九九二年刊）の中の一編である。『少年の日々』には、他に「女郎グモ」「ユキ彦」「メジロ」が載せられている。それぞれ子ども遊びを素材にとり、「ぼく（修ちゃん）」の目から見た人間の姿が描かれている。

教科書には「紅鯉」が平成八年から一一年まで、東京書籍五年生教科書に掲載された。また同じく「紅鯉」が平成二三年から三省堂六年生教科書に掲載されている。出典では登場人物の会話はすべて熊本方言で書かれているが、教科書に掲載されるにあたり、共通語に変えられている。

二 叙述について

町中を南北に流れる川は、せきがしまると、たちまち二、三十センチの浅せに変わってしまい、しばらくは町じゅうの子どもも大人も、手に手にあみやもりを持って、魚とりに夢中になる。

「たちまち」とあるので、すぐに。用水路から川に流れ込む水が大量であったことがわかる。「二、三十センチの浅せ」なのだから、水路からのせきがしまっても、上流からの水の流れはある。「しばらくは」とあるので、せきをとめてから数日程度だろう。「町じゅうの子どもも大人も」、「夢中になる」のだから、大勢の人間の心をとらえていた遊びだった。ただし、年齢は幅広いが、男性のみ。女性は魚とりに夢中になっていない。

ぼくは麦わらぼうしにゴムぞうり、半ズボンにランニングシャツといういでたちで、えの短いあみをかた手に、魚を求めて川の中を歩き回った。

「麦わらぼうし」は強い日差しを避けるため。「ゴムぞうり」は川の中に入るのに、濡れても大丈夫な履き物。「半ズボン」も川の中に入るため。半ズボンが濡れない程度の深さにしかならない。「ランニングシャツ」はタンクトップの形をした白い下着。水の中に手を深く突っ込んでも袖が濡れないような格好をしている。「えの短いあみ」はすばや

く動かして魚を捕らえるためにえが短い。

それでもときに、浅い水たまりににげおくれたやつが残っていることもあって、三十センチ以上もあるコイをとったという友達の話の聞いたりする、いつか自分にもそういう幸運がまいこんでくるような気がして、しつこく川の中を歩き回った。

「ときに」とあるので、たまには浅瀬にコイやウナギがいる。「幸運がまいこんでくる」とあり、力量でなくて運で大物のコイが手に入るとぼくは考えている。「しつこく」歩き回っており、簡単にあきらめることなく何度も同じ場所を確認していることがわかる。

そちらには人がかげがなく、なんとなく幸運が待っているような気がして、ぼくはその支流の方へ入っていった。

「なんとなく」なので、特に根拠があったわけではない。直感的に人がいないところに大きな獲物がいるような気がした。「幸運が待っている」とあり、幸運がぼくに見つけられるのを待っていると、ぼくは考えている。

ぼくはそつと音をたてないように土手に上がり、注意深く川もの下に目をやりながら、岸辺のくさむらをつみしめて歩いた。

「そつと音をたてないように」上がったのは、獲物であるコイやウナギに気づかれて逃げられないようにするため。「注意深く」「目をやりながら」なので、移動しながらも変化を見逃すまいと、川の支流を見つめ続けた。「ふみしめて」とあるので、力をいれてしつかりと踏みながら。獲物を見つけたらすぐに行動できるようにするためなのか、

それとも無造作に歩くことで大きな音をたてないようにするためなのか、いずれにしても視線だけでなく歩き方も注意深くなっている。

胸がきゅつときん張し、ぼくは立ち止まってじっと目をこらした。

「きゅつときん張し」とあり、胸が高鳴り、鼓動を感じるような様子。「じっと目をこらした」のだから、波紋のあたりに視線を固定して、今まで以上に注意深く見つめた。

ぼくはしのび足に歩いて、そつと水に足を下ろし、あみを川下に構えると、左手をぐいっともの下につっこんだ。

「しのび足」「そつと」とあるので、振動や音をたててコイに気づかれないように近寄った。逆に手を突っ込む時は、そろそろとではなく「ぐいっと」。あみのほうへコイを追い出すために、わざと気づかれるようにした。

とたんに、何かを激しく手をはじいた。

「とたんに」とあるので、すぐに。「何か」とあり、目にはコイの姿は見えていない。「激しく」「はじいた」ので、手がコイのすぐそばにあり、コイが尾を左右に振ってあたったのだろう。

ぼくはあわててあみをあげた。

コイをあみに追い出すつもりではいたが、思っていたよりもすぐに反応があったことと、思っていた以上に手の近くにコイがいたことであわててしまった。

と、そのとき、だれかがぼくの背中に声をかけた。

「そのとき」というのは、手あたりしだいに周囲をあみですくっていた時。ぼくの急いでいる様子を見て、おじさんは話しかけてきたのだろう。「だれかが」とあるので、誰が話しかけてきたのか最初はわからなかった。

ぼくは、となりのうちのシャモを思い出した。

おじさんの顔がシャモに似ていると、ぼくは思った。会話の内容よりも、おじさんの顔に意識が向いていることがわかる。初対面なのだろう。「故郷」でヤンお婆さんの登場する場面では、「わたし」はヤンお婆さんをコンパスに喩えていた。

「コイみたいな……。」

「みたいな……。」と、断言せずに、ぼかして言っている。コイみたいな何か大きな物、という言い指し表現。はっきりとコイを見たわけではないので、自信がない。

おじさんは鼻の横を人さし指でこすりながら、細い目でぼくを見た。

「人さし指でこすりながら」とあるのは、おじさんの癖なのだろう。「細い目で」とあるので、目を細めたのではなく、おじさんはもともと細い目をしている。

それから、やおら右手であみを構えると、ぼくよりはるかにしんちょうに手早く、もの下をさぐった。

「やおら」とあるので、落ち着いてゆっくりとあみを構え始めた。

急に、いきおいよく構えたのではない。「ぼくよりはるかに」とあり、ぼくも注意深く藻の下に手をつっこんでいたが、それよりもさらにしんちょうに手早く動作を行った。

「……………」。

おじさんの問いにぼくは返事をしなかった。本当にコイがいた、と断言することにためらいがあったためだが、返事をしないことで、かえっておじさんに不信任をあたえることになった。

ぼくはしだいに自信がなくなっていた。

「しだいに」とあるので、本当にコイがいたのか、振り返ってみればみるほど、だんだんと自信がなくなった。

確かに、何か大きな物がゆらりと動いたように思えたし、あの手にふれた感じよきは、直感的にコイだと思っただけで、今ではそれがコイだったかどうか、もう自信がなかった。

「確かに」とあるので、大きな何かが動いたことは間違いないと思っっている。「見えたし」とあり、見えたことと触れた感觸の二段階の根拠がある。「今ではもう」とあるので、最初は自信があったが、だんだんと時間がたつにつれて自信がなくなっていた。

それから、横目でぼくをにらむと、ゆっくりと川下の方へ歩いていった。

「それから」とあるのは、あみのごみをはたき落とした後。「横目で」にらんでいるので、ぼくに向き合っただけではなく、別の方を向きながらにらんだ。「ゆっくりと」なので、あわてたり、急いだりす

ることなく歩いて行った。

けれども、期待はむなしかった。

「むなしかった」とあるので、期待にこたえる成果はなく、無駄におわった。

それから、ぼくはその小川を下って行って、再び本流の方へもどった。支流から本流に舞台が移った。

そして、何気なく上流の浅せに目をやったとき、ぼくは自分の目をうたぐった。

「何気なく」とあるので、コイをさがして注意深く目をむけたわけではない。たまたま目に入った。「目をうたぐった」とあり、見えたものが本当かどうか、にわかには信じられなかった。幸運が舞い込んできた。

ぼくは幸運に舌なめずりしながら、さりげないふうをよそおい、コイに気づかれないように静かに川に下りた。

「幸運に舌なめずり」とあり、紅色のコイの発見を幸運だと考えている。ペコちゃんのように本当に舌なめずりをしているのでなく、心の中でしめしめと思っている。「さりげないふうをよそおい」とあるが、よそおっているのが、意図的に演じている。さりげなさを演じたのは、上流や下流にいる人に気づかれてコイを横取りされないため。視線を固定したり、身をかがめたりしてコイを見つけたとばれないように気をつけた。さりげなさは、コイに気づかれないためではない。コイに

対しては、あわてたり急いだりせずに、ゆっくりと、音を立てないように注意しながら川に下りた。獲物をつかまえる瞬間の動作とは異なった様子で近づいている。

とつさにぼくはあみを出した。

「とつさに」とあるので、瞬間的に、すぐに。支流の時はあわててあみをあげたが、今回は素早くあみを出した。

しかし、そのあみをかいくぐって、赤いかたまりが矢のように後ろの方へ飛んでいくのが見えた。

「かいくぐって」とあるので、あみをすり抜けて。まっすぐ泳いだのではなく、機敏に小刻みな変化をつけながら泳いだ。「赤いかたまり」なので、はつきりと姿形をとらえたわけではなく、色だけが確認できた。「矢のように飛んでいく」とあり、泳いでいる様子を矢が飛ぶようにと喩えている。それくらい素早い速度だった。

ぼくは身をひるがえして、ばしやばしやと浅せを追いかけて走った。

「ひるがえして」なので、振り向いて。「ばしやばしやと」走ったのだから、もう静かにコイに気づかれないように動こうとは思っていない。激しい音と波を立てながら走った。同様に周りの人に気づかれないようにという意識もなくなっている。

まったく、いっしゅんの出来事だった。

「まったく」というのは、完全にや全然といった意味ではなく、本当に、実にという意味。「いっしゅんの出来事」だったのは、コイがぼ

くに気づいて逃げるまでの出来事。

ぼくはぼう然として、深みをながめていた。

「ぼう然」は気が抜けて、ぼんやりしている様子。神経を集中させてコイに迫っていたが、逃げられた今となっては、ぼんやりしている。

ぼくの胸に、じわっと口おしさが広がっていった。

「じわっと」なので、捉え損ねてすぐにくやしなかったわけではない。徐々に、少しずつ残念な気持ち膨らんでいった。

やがて、ぼくのただならぬ様子に気がついて、川上と川下にいた者たちが走ってきた。

周りの人たちに気づかれた。「ただならぬ様子」とは、ぼう然としている様子だけでなく、その前のぼしやばしやと走ったことも含まれているだろう。「走ってきた」のだから、周囲の人たちも、ぼくの動作から大物を予感したのかもしれない。

「ベンゴイ(紅鯉)。」

ぼくはぶっきらぼうに答えた。

「ベンゴイ」とカタカナ表記なのはなぜだろうか。地の文では紅鯉と漢字表記になっている。このときのぼくは、ベンゴイが紅色のコイを指す名前だと知ってはいるが、名前の意味は知らなかったのかも知れない。「ぶっきらぼうに」とあるので、返事の仕方に愛想がない。ふてくされたような言い方だったのかもしれない。顔見知りの中学生にばれたのがくやしかったというよりも、捉えられなかったくやしさが

原因だろう。

それは、ぼくがさつき示したのよりいくぶん大きいような気がした。

「それ」は、中学生が両手で示したベンゴイの大きさ。「いくぶん」とあるので、少し、ちよっとだけ大きい気がした。

「ほんとにいたのかい、修ちゃん。」

同級生のひろしは、ぼくのことを「修ちゃん」と呼んでいる。おそらく作者の修三の名前をもじったもの。「修ちゃん」という呼び方は、家族や親しい間柄の年上の者が、年下の者に使うような呼び方である。だがひろしがぼくのことを「修ちゃん」と呼ぶのは、年下や目下のような存在と思っているからではなくて、距離の近さや親しみを表しているからだろう。

大人たちの間で、コイはしだいに大きくなっていった。

「大人たちの間」なので、子どもではない。大人同士のやりとりの中で起こった。「しだいに」とあるので、だんだんと、伝言を重ねるにつれて、コイのサイズが大きくなった。

ぼくが最初示したときのコイとは、まるで別のコイほどの大きさになっている。

「示した」のは見せたのではなく、手でコイの大きさを示したということ。「まるで」とあるが、まるで別のコイのようだ、といった喩えと、まったく別のコイだ、といった意味と二つとれる。ここでは後者の意味だと考えたい。

もう一人の中学生が首をひねった。

「首をひねった」とあるので、首をかしげた。疑問に思っている。

ひとしきり深みをのぞいて、おじさんはふり返って言った。

「ひとしきり」なので、しばらくの間熱心に。「ふり返って言った」とあるので、のぞきながら言ったのではなくて、のぞく動作を終えて、他の人たちのほうに向けてから言った。

おじさんはぼくを見ると、なんだといった顔をして、足下にぺっとつばをはいた。

「なんだといった顔」は、ちえつといったがっかりした表情。なんだお前か、という思い。つばをはくのもおじさんの癖なのだろうか。

ひろしがあわれむような目で、ぼくを見た。

「あわれむような目」なので、ひろしがぼくのことをかわいそうに、気の毒に思っている、ぼくが感じた。少し目を細めたような表情。ひろしは、ぼくが中学生にばかにしたように見下ろされたり、周りの人たちが次々と立ち去っていく状態をあわれんだ。

ぼくはあわてた。

「あわてた」とあるので、ぼくは思いがけない展開に、驚き、落ち着きを失った。それまではぼう然としていたり、ぶつきらぼうに答えていたが、のんびりしている場合ではなくなってきた。

ぼくはくちびるをかんで、おじさんをにらみつけるよりほかなかった。

「くちびるをかんで」とあるので、くやしさをこらえている。「にらみつける」とあり、信じてくれないおじさんへの怒りを目で表している。激しいくやしさと同時に、「よりほかなかった」とあるので、紅鯉がたしかにいる(いた)という証拠がなく、ぼく一人しか見ていないので、何を言っても信じてもらえないだろうというあきらめがある。ぼくはいつも言葉で説明することをあきらめてしまっている。

畑帰りなのか、しよいかごを背負っている。

ぼくを信じてくれるおばさんが登場する。「しよいかごを背負っている」ところから、おばさんはこの日も畑仕事をしている。町じゅうの子どもも大人も、男たちは皆魚とりに夢中になって遊んでいる中で、おばさんは日常の労働を行っている。魚とりコミュニティの外側のおばさんだけがぼくを信じてくれている。

ぼくは、みんなをうらめしく思った。

「みんなを」とあり、シャモに似たおじさんだけでなく、信じてくれない全員をうらめしく思っている。「うらめしく」なので、憎らしい。「腹立たしく思った」と「うらめしく思った」を比べてみると、うらめしい気持ちは、激しい勢いこそないが、思は一過性のものでなく、暗く静かに強い。

青年のあみに何もかからなかったのを見て、ぼくを取り巻く人の輪がくずれかけたときのことである。

「くずれかけた」とあるので、まだ完全にくずれたわけではない。

何人が興味を失って去っていきこうと動作を取り始めた。「ときのことである」という言い方は、ものものしく、語り手がこれから起こる出来事を強調して述べようとしていることがわかる。

川下からこしまであるゴム長をはいたひげづらのおじさんが、じゃぶじゃぶと水をはじき飛ばしながら上ったきた。

「こしまであるゴム長」なので、誰よりも深いところに入っていける。「じゃぶじゃぶと」とあり、気配を殺してコイなどに近づこうとはしていない様子がわかる。

手にとあみをかかえていた。

「とあみ」は投網であり、おもりのついた網を投げて魚を丸ごととらえてしまう道具。ぼくの「えの短いあみ」や、シヤモに似たおじさんや青年の「ひとまわり大きなあみ」、他の人たちの「もり」などと比べて、遙かに高性能の道具を持ったおじさんが登場する。「かかえて」歩かなければならないほどかさばる。

おじさんは陽気な声で聞いた。

「陽気な声」なので、ぎすぎすした場の雰囲気にとぐわなない声。いわゆる空気を読まない人なのではなくて、強力な装備で身を固めたひげづらのおじさんには余裕があるのだろう。

ひろしが目を丸くして、ぼくの顔を見た。

「目を丸くして」とあるので、驚いて目を大きく見開いている。紅鯉がいたことに驚いているのか、それともぼくが本当のことを言って

いたことに驚いたのか。「ぼくの顔を見た」とあるので、ひろしは紅鯉を見ながら次のセリフをいったのではなくて、わざわざぼくの顔に向かって言った。

「修ちゃん、ほんとに、いたんだ。」

「ほんとに」とあり、ひろしは紅鯉は本当はいないと思っていた。つまりぼくを疑っていた。「いた」でなく「いたんだ」なので、紅鯉の発見に驚いているのではなく、ぼくの証言が本当だったことに驚いている。

ぼくはひろしをにらみつけてやった。

「にらみつけて」とあるので、強くにらんだ。鋭い視線でひろしを見た。「やった」とあり、わざわざ鋭くにらむ表情をひろしに向けた。うらみに思っている対象の中にひろしも含まれていた。最もぼくに近い存在であったひろしにも疑われていたことに腹を立てている。

でも、そのときはもう、そんなことはどうでもよかった。

「そのとき」は、みんなに疑われて、ひげづらのおじさんのおかげで疑いははれた今。「もう」とあるので、疑われる前は紅鯉がとれずにくやしかったが、今になってみれば、くやしい気持ちはどこかにいつてしまった。「そんなこと」とは、紅鯉はぼくが手に入れるべきだったということ。「どうでもよかった」とあるので、紅鯉を手に入れることよりも、疑いが晴れたことのほうが、今のぼくの心の中では大きな出来事だった。

ぼくは胸を張って、例のわし鼻のおじさんをにらんだ。

「胸を張って」とあるので、胸をそらせて、自信たっぷりな様子。初めからうそをついていなかったのだ、と得意になっている。「例の」という言い方から、わし鼻のおじさんへの軽蔑の思いが、ぼくにはあったことがわかる。「にらんだ」とあり、ぼくはひろしに対してにらみつけたように、おじさんをにらんだ。おじさんをにらむのは二回目。紅鯉がいないと疑われたことへのうらみと、支流で疑われたことへのうらみとが重なっているのだろう。

ぼくはなんだか気がぬけてしまつて、深みのふちにぼんやりたらずんでいた。

「なんだか」とあるので、わけははっきりとしない。なんとなく。「気がぬけてしまつて」とあり、気持ちの張りがなくなつた。気を抜こうとしたのではなく、自然と緊張感がほだけてしまつた。「ぼんやり」とあるので、ぼうつとしている。頭がぐるぐる回転しているというよりも、今までに起こつたことを反芻している。「たらずんでいた」とあり、しばらくじつとして、その場に立ち止まつている。

うそつきにならなくてよかつたという満足感の後から、じわじわと、あの美しいベンゴイを自分の手に入れることができなかつたくやしさが、また頭をもたげてくる。

「満足感」は、ひげづらのおじさんの強力な道具という「幸運」によつてもたらされた。一方の「くやしさ」は、自分の力で紅鯉を捕ることができなかつたという残念な思い。「じわじわ」とあるので、徐々に、少しずつくやしくなつてきた。「また」とあり、先ほど、疑われる

前のくやしさが蘇つてきた。「頭をもたげてくる」とあるので、疑われたことで、一時それどころではないと隠れていた気持ちが表に出てくる。

ぼくは急に胸がいつぱいになつて、あやうく泣きだしそうだった。

「急に」とあるので、くやしさがじわじわと蘇つたのとは対照的に、勢いよく、わずかな時間で。「胸がいつぱい」は、感情が高ぶつていく様子。おばさんの一言が、紅鯉がとれなかつたくやしさがじわじわ高まってきたぼくの心に、別の感情を急激に高ぶらせた。みんなが疑い、誰も信じてくれなかつたときのぼくの心細さ、かなしさが急によみがえつてきた。「あやうく」とあるので、もう少しのところ。急に感情が大きくなつたため、泣くのを我慢することが困難だった。「泣き出しそうだった」とあり、泣きそうだったが、実際は泣かずにすんだ。おばさんだけは、ぼくの気持ちを理解してくれていた。

三 考察

ぼくの経験した出来事とはいったい何だったのだろうか？ぼくは紅鯉の存在を信じてもらえず、確かな証拠を示すことができないまま、みんなに信じてもらえなかつた。とくにわし鼻のおじさんには、二回疑われた。どうすることもできないまま「うそつき」の烙印をおされそうになつた。何の非もないぼくは、しかし、何を言うこともできず、うらめしい思いを抱えて、黙つてにらみつけることしかできなかった。わかつてもらえないもどかしさに打ちのめされたぼくの経験は、不幸な出来事だった。

ぼくのまわりの人間を、ぼくとの距離で関係を図示すると次のようになる。年齢の違いだけでなく、持っている道具も子どもたちと大人とは異なっている。魚とりコミュニティのヒエラルキーといってもよいかもしれない。

わし鼻のおじさん

大人たち

青年

中学生

ひろし

ぼく

もつとも距離のあるわし鼻のおじさんに疑われたことをきっかけに、大人たちやついにはひろしにまで疑われたぼくは、まったく孤立してしまう。ひとりぼっちになってしまふ状況は、心細かっただろう。

窮地に追い込まれたそんなぼくを救ったのは、とあみをかかえたひげづらのおじさんと、手ぬぐいをかぶったおばさんとの二人の人物だった。ひげづらのおじさんは、魚とりコミュニティの住人である。しかしほかの大人たちとは異なり、こしまであるゴム長と、とあみという強力な道具を持つおじさんは、魚とりにおいてはもつとも力をもった存在である。そしておじさんの道具によって、ぼくの疑いは晴れ、紅鯉は持つて行かれた。ぼくを救ったのは、たまたまやってきたおじさんと、彼がたまたま持つていた道具によってであった。

一方の手ぬぐいをかぶったおばさんは、男たちの魚とりコミュニティの外に位置する存在である。昼間から魚とりに興じる男たちを尻目におじさんは、ぼくを窮地から救ってくれたが、ぼくの気持ちには無関心である。それにはたいしておばさんは、うそつきの疑いをかけられ、みんなに信じてもらえないぼくを慮っている。つまり、ぼくの経験は、

たまたま強力な道具をもっていたおじさんに救われ、魚とりコミュニティの外にいたおばさんがたまたまやって来たことで理解される、という経験だった。疑われたことが不幸な出来事であったとすれば、救われ、理解されたこともたまたまの幸運な出来事であった。もしひげづらのおじさんやおばさんがこなければ、ぼくはうそつきの烙印をおされていただろう。実はぼくの葛藤は何も解決されていない。

それではぼくの窮地をぼく自身の手で解決することはできたのだろうか？ 確かな証拠がない状況で、ぼくは「だって、いたんだもの！」とさげびたかったが、それはなんの証拠にもならないことを理解し、にらみつけるといふ抵抗の印を表しながらも沈黙していた。確かに、ぼくが丁寧に状況を説明したとしても、まわりの人たちは信じてくれなかったかもしれない。巧妙なうそだと、疑ったままという結果に至ったかもしれない。しかし、重要なことは、ぼくは、説明をして、それでも信じてもらえなかったのではなく、何を言っても無駄だとあきらめていた、という点である。ぼくの会話を抜き出してみると、そのことが顕著にわかる。ぼくは具体的な問いには返事をするが、詳しい説明を求められるところでは、沈黙している。信じてもらえないという結果だけをとれば、説明の努力をしても、沈黙を貫いても同じかもしれない。しかし、コミュニケーションの形としては全く意味が異なってくる。ぼくは信じてもらうための努力を放棄している。ぼくが陥った状況は不幸な出来事だったかもしれないが、解決のための労を自ら放棄して、成り行きにまかせたのがぼくのコミュニケーションの態度である。詳しく説明していれば、あるいは何人かは信じてくれたかもしれない。ぼくの気持ちも理解してくれたかもしれない。ひろしや青年は、ぼくの言葉に耳を傾けたかもしれない。だが、ぼくはそ

うせず、全てが幸運にも解決したあとで、ひろしをにらみつけること
しかできなかった。こうしたコミュニケーションの形が紅鯉には鋭く
描かれている。

